

ブラインドサイト～小さな登山者たち～

2007(平成19)年7月18日鑑賞(東映試写室)

★★★★



監督＝ルーシー・ウォーカー／出演＝サブリエ・テンバーケン／エリック・ヴァイエンマイヤー／ソナム・ブムツォ／ゲンゼン／ダチャン／キーラ／テンジン／タシ（ファントム・フィルム配給／2006年イギリス映画／104分）

……きっとあなたはこの映画を観て、世界にはこんな感動的な物語があるのだと思い知らされるはず。盲人初のエベレスト登頂もすごいが、盲人の子供たちを登山させようと企画した「国境なき点字」の創設者である盲人女性もすごい。ハイライトは、頂上まであと数百メートルの地点での「進むべきか、それとも退くべきか」のディスカッション！ 裁判員制度の実施を控えて、私ならこんな議論風景を格好の教材にするのだが……。

盲人初が、ここにも……？

弁護士仲間で有名な話の1つは、盲人初の弁護士となった京都の竹下義樹弁護士。私は彼と直接の知己はないが、彼の受験勉強を手伝っていたという私の後輩のH弁護士の話を通じて、その人となりや努力ぶりは彼が弁護士登録した時から知っていた。そして、今や彼は「障害と人権全国弁護士ネット」代表として弁護士活動をフル展開している他、趣味の分野においてもマラソンや登山等でフル回転。1965年の中3の時に外傷性網膜剥離で失明してから既に42年間走り続けているわけだが、とにかくその努力ぶりには常々頭が下がる思いで、感服していたもの。この映画ではじめて知った、盲人初のエベレスト登頂に成功したアメリカ人登山家エリック・ヴァイエンマイヤーの姿を見て、そんな竹下弁護士のことを思い出したのはたぶん私だけだろうが、このエリックを見て私は竹下弁護士を見るのと全く同じ思いが……。エリック・ヴァイエンマイヤーは12歳で視力を失ったが、元海兵である父親は3人のティーンエイジャーの息子たちを連れて世界中の山を登る旅行を計画し、忍耐強くその活動を続けていったとのこと。その結果、彼は2001年5月25日、世界最高峰のエベレスト登頂に

成功し、また2002年9月5日には、オーストラリアのコジオスコ山への登頂を果たした瞬間、彼の7年越しでの7大陸の7つの最高峰に登るという夢が達成されたとのこと。それにしても、スクリーン上に登場する彼の、「視力を失い、暗闇だけの世界の住民になることに恐れは感じていなかった。ただ端に追いやられ、忘れ去られ、廃人のように扱われる事が恐怖だった」「視力（SIGHT）を失くしたからといって、展望（ヴィジョン）を失うわけではない」というセリフは、実に重みのあるもの……。

サブリエ・テンバーケンもすごい女性！

この映画は、14歳～19歳の6人の盲人の子供たちによる、エベレストの北側にある標高7000mの「ラクバリ」への登頂の姿を描くもの。彼らを直接ラクバリへ導いたのは、前述した盲人としてはじめてエベレスト登頂に成功したエリック・ヴァイエンマイヤー。しかし、子供たちをラクバリ登頂という夢に導いたのは、エリックに対してメールを送り、「あなたがエベレストに登頂できるならば、我々も境界線を飛び越え、盲目でも社会に参加し、目標を達成できるのだと世界に示す事ができるはずだ」と訴え、また「もし可能ならば、ちょっとした登山のワークショップを子供たちに実施してもらえたら素敵です」と語りかけた女性サブリエ・テンバーケン。彼女は盲人のドイツ人教育者であり、チベットに盲人学校と活動団体である「国境なき点字」を創設したというこれまたすごい女性。

なぜ盲人のドイツ人がチベットへ？ そしてまた、なぜチベットで盲人学校を？ その詳細は、エリックへ宛てたメール全文とともに、プレスシート（パンフレット）を読んでもらいたい。要は大学でチベット学を専攻する中、チベット語の点字教材がないことを知った彼女は自分でそれを作り、中国政府の難色にもかかわらず、強引にその夢を実現していったというわけだ。そして1998年公私ともに彼女のパートナーとなったポール・クローネンバーグとともに、チベット初の盲人学校と活動団体である“Braille Without Borders（国境なき点字）”を立ちあげた。そして現在では、そのモデルが発展途上国における視覚障害者用の教育施設の設立のモデルとして国際的に受け入れられるようになったとのこと。

チベットの子供たちはこの学校でチベット語、中国語、英語での読み書きを習うとともに、社会において、盲目の人が独立した生活を送るためさまざまなノウハウを習得しているとのこと。そして今回は、その中から①ソナム・ブムツォ、②ゲンゼン、

③ダチャン、④キーラ、⑤テンジン、⑥タシという6人の男女が「ラクパリ」登頂にチャレンジすることに……。世界には何ともすごい女性がいるものだ。

プロデューサーも女性！ 監督も女性！

外国人は名前だけでは男女の区別がつかないが、この映画のプロデューサーとなったシビル・ロブソン・オアーは、サハラ砂漠以南のアフリカ諸国の独立戦争を題材にしたドキュメンタリーのプロデューサーを務め、また最新プロジェクトは、サブリエ・テンバーケンの自伝『わが道はチベットに通ずー盲目のドイツ人女学生とラサの子供たち（原題：My Path Leads to Tibet）』の映画化という、これまたすごい女性。

他方、監督のルーシー・ウォーカーも、フィルムメーカーズ・マガジンにおいて、「映画界のニューフェイストップ25」に選ばれた注目の女性。彼女はアーミッシュのティーンエイジャーを題材にしたドキュメンタリー映画、『Devil's Playground』によって、サンダンス映画祭等で素晴らしい評価を受けているとのこと。そんな、ドキュメンタリー映画に自信をもつルーシー・ウォーカー監督だからこそ、6人の盲人の子供たちによる「ラクパリ」への登頂というドキュメンタリー映画に挑戦できたのだろう。したがって、こんなすごい女性たちの力によってつくられた、『ブラインドサイト～小さな登山者たち～』が、2006年英国インディペンデント映画賞で最優秀ドキュメンタリーノミネート、2007年ベルリン国際映画祭でパノラマ観客賞等とされたのは当然。

『ココシリ』と同じようなショックと感動が……

ルー・チューアン
陸川監督の『ココシリ』は、「チベットカモシカの密猟者たちと民間の山岳パトロール隊との闘いそして、そのために必然的に生ずるパトロール隊と厳しいココシリの自然との闘い」を描いた映画だった（『シネマルーム10』242頁参照）。そして、これを観て自分がいかにこんな世界を知らなかったかということ思い知らされてショックを受けるとともに、この映画によってチベットカモシカ絶滅の危機を広く世界に知らしめ、チベットカモシカの数も1万頭から3万頭まで回復するという成果を生み出したことへの感動が広がったもの。

この『ブラインドサイト～小さな登山者たち～』を観たときのショックと感動もそれと同じようなもので、盲人によるエベレスト登頂の快挙や、チベットでの点字学校

の開設、そして盲人の子供たちを「ラクパリ」へ登頂させようとする計画を立てそれを実行していく構想力と実行力のすごさにショックを受けるとともに大きな感動を覚えることに。日本では、目下『ヒロシマナガサキ』(07年)、『ひめゆり』(06年)そして『TOKKO 一特攻一』(07年)などのドキュメンタリー映画が人気を集め少しずつ広がっているが、もっと広く世界に目をむけたドキュメンタリー映画を次々とつくってもらいたいと思った次第……。

進むべきか……？ それとも退くべきか……？

「ラクパリ」登頂を目指すのは、エリック・ヴァイエンマイヤーとサブリエ・テンバーケンそして6人の子供たちとその1人1人につくガイドたち。盲人が大変な危険を伴う山に登っていくというのは私にはとても想像できないが、盲人になればこそ、音や風そして空気の動きなどに集中しながら一歩一歩足を進めていく姿は感動的。

しかし同時に、その集中力のため健常者よりも疲れが大きいことも事実。標高5000~6000mともなれば呼吸が苦しくなり、さまざまな症状が表れてくるのは当然で、6人の子供たちにも少しずつ異変が……。その結果、全員でこのまま頂上を目指すことは難しくなり、3人は途中で下山をやむなくされることに……。そこで分かれたのが、進むべきか、それとも退くべきかの意見。さあ、そこではどんな結論が……？

ディスカッションの大切さを痛感！

勝新太郎の『座頭市』シリーズを観ればわかるように、盲人の場合特にとぎすまされるのが聴覚と嗅覚、そして触覚。エリックのリードのもとにサブリエや6人の子供たちが「ラクパリ」への登頂にチャレンジしている姿をみると、そのことが特によくわかる。ところが今回それ以上にビックリしたのは、盲人たちのディスカッション能力の高さ。昨今、米倉涼子・高岡早紀・佐藤江梨子という美人女優たち、さらには元テレビ朝日の社員という素人女性めを含めて次々と「浮名」を流している歌舞伎界のプリンス市川海老蔵サマの売りは目力め。したがって伊藤園の「お〜いお茶」のテレビCM等がそれを最大限活用しているのは当然。

また「顔で笑って心で泣いて」という表現方法が得意な日本人は、本来表情で語ることに馴れているため、西欧諸国や中国・韓国に比べると、しゃべりが下手でディスカッション能力が低い。これは、民主主義国家として成立していく上で最大の難点だ

が、その点盲人は表情で語るができないから、すべて口で、しゃべりで意見を伝えなければならないことになる。そこで健常人よりも盲人の方が、口が達者。そしてディスカッション能力が磨かれることに……。この映画に登場するサブリエを見ると、きっとあなたもそう思えてくるのでは……？

もちろんこのディスカッション能力の高さは、文章による説得力にも通じるもの。したがって①1通のメールによるエリックへの働きかけ、②エリックが協力を了解した後の、「ラクバリ」登頂への働きかけ、の説得力はすべてサブリエのディスカッション能力から生まれたもの。そんなサブリエのディスカッション能力は、あと数百メートルで頂上という時点まで至り、進むべきかそれとも退くべきかという大事な分かれ目で発揮されたのは当然。さて、サブリエの主張はどんなもの……？

登頂の真の目的はナニ……？ それの問題だ！

努力すれば夢は叶う！ そのテーマで30年間全6作の映画をつくってきたのが、シルベスター・スタロンの『ロッキー』シリーズ。しかし、それはあくまで映画の中だけの話であって、現実には必ずしもそうはいかないもの。もちろん、観客はそれを理解しつつ映画館へ足を運び、非日常的なスクリーン上の世界を観て感動するのだが……。サブリエが登山家のエリックを招き、6人の子供たちが「ラクバリ」登頂を目指したのは、一体何のため……？ 頂上まであと数百メートルという状況下で、6人の子供のうち3人に体用上・健康上の問題が発生した場合、そこでどのような次の行動を決断すべきかについては、結局その登頂の真の目的の再確認が最重要テーマとなることに……。私は「勝ち組 vs. 負け組」という分類は嫌いではなく、当然だと考えているタイプ。しかしそこで問題は、何が勝ちで何が負けなのかという基準は必ずしも単純ではないということ。また、成功と失敗のどちらがいいかと聞かれれば、誰だって成功がいいと答えるに決まっている。しかし実は、ここでも何が成功で何が失敗なのかは、必ずしも明確ではないのだ。

この映画に即してそれを具体的に言えば、頂上まで数百メートルを残して今子供たちが下山したら、子供たちは失敗者そして負け組に……？ さあ、その点をよく考えてみよう。単純な成功論、ヒーロー論ではない、真の成功やヒーローについてこの映画を観ながらホントにじっくりと考えてみたいものだ。

2007(平成19)年7月19日記